

ミャンマーにおける木造建築の天井について

著者	佐藤 桂
著者（英）	Sato Katsura
雑誌名	武蔵野大学建築研究所紀要
号	1
ページ	25-32
発行年	2020-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001263/

ミャンマーにおける木造建築の天井について

On the Ceiling of Myanmar Wooden Architecture

佐藤 桂^{*1}

SATO Katsura^{*1}

ミャンマー	木造建築	天井
多重屋根	バガン時代	コンバウン時代

1. はじめに

ミャンマーに残る伝統的木造建築を対象として、これまで少ない手掛かりをもとに考察を続けてきた。特に、日本の古代建築との類似性について、構法上の具体的な共通点や相違点を見出したいと考えてきた。

日本は歴史的に中国から大いに影響を受けてきたことは、改めて言うまでもない。しかしながら、床を張り、玄関で履物を脱いでこれに上がる習慣などは、中国建築ではなく、むしろミャンマーなど東南アジア地域の高床文化と共通しているように思われる。ミャンマーの木造建築を注意深く観察することで、翻って日本建築の特質をも浮かび上がらせることはできないだろうか。

本稿は、このような考えのもとに、ミャンマーの木造建築の天井に注目するものである。天井を張るという行為は、天井裏空間を形成することと同義である。つまり、建築の外観と内部空間とは、このことで1対1の関係をやめ、構造と意匠との分離ははじまる。日本の場合は、天井裏の隠れた部分を利用して、桔木など構造材を工夫し、見せる部分には化粧材を導入して、構造と意匠とをそれぞれに発展させてきたという歴史がある。

以下では、ミャンマーの木造建築の天井に関する史料を幾つか取り挙げて検討する。とはいえ、バガン時代とコンバウン時代のほかには、ほぼ情報が存在しないため、結果的にこの2つの時代の比較となることを、予め断っておかねばならない。

2. バガン時代の多重屋根の天井

まず、バガン時代の木造建築に関する手掛かりとして、煉瓦造の僧院遺構の壁面に残された痕跡が挙げられる(Figs. 1, 2)。1975年の地震後に作成されたインベントリー⁽¹⁾には、同種の遺構が400件ほど記録されているが、残存状態の良いものは多くなく、天井の痕跡が確認できる遺構は20件ほどにとどまる(Figs. 3 to 22)⁽²⁾。

ここで天井の痕跡とみなしたのは、屋根に近い中央上部に位置する、煉瓦1から3層ほどの水平の溝である。

現存する遺構はすでに修復の手の入ったものが多いため、注意が必要であるが、インベントリーの写真と現地での観察から、これらがオリジナルであろうと判断した。

ここで注意されるのは、天井材を挿入したと考えられる水平溝の両端に位置する桁材の大入れが、溝の下側ではなく、上側にあること、また、天井裏となる破風の中央に開口部が認められることである。情報が少ないため、あくまでも推測の域を出ないが、構造材である桁材は天井板の裏側に隠され、室内からは見えなかったと想像される。須弥壇の上部に位置する天井は、天蓋のごとく、明らかに特別な存在で、彩色なども施されたであろうから、構造材はこれを邪魔しないよう、極力隠されたものと推測される。また、天井裏空間へのアクセスを可能とする開口部に関しては、これが当初からあったとすれば、煉瓦壁が棟木を受けていたとは考えにくく、建設のために必要であったことが推測されるものの、ほかに具体的な用途があったのかどうか、現段階では全く不明である。

ところで、今日、我々が現地で目にする復元建物は、1990年代に考古局によって整備されたもので、博物館にも復元模型が多数展示されている(Fig. 23)。当然、調査結果を踏まえたものであろうが、構法的な検討に関しては決して十分とはいえないことが指摘される。例えば、1995年に復元されたシン・アラハン僧院⁽³⁾(13世紀)は、インベントリーの写真(すでに1959年に考古局によって修復済)と比較すると、痕跡とは異なる構造材が使用されていることが判明する(Figs. 24, 25)。同じように、シンビューシン僧院群内の698僧院(14世紀)もまた、1991-1992年に復元・整備されたものだが、構造的には新築同然といえ(Figs. 26, 27)、小屋梁の位置も本来の位置よりも低く、適切ではないことが分かる。

3. コンバウン時代の多重屋根の天井

コンバウン時代になると、僧院は「ポンジーチャウン」と呼ばれる木造が主流となり、尖塔や多重屋根の堂宇に天井が張られている様子を実際に見ることができる。

^{*1} 工学部建築デザイン学科非常勤講師

ただし、このように天井を張るのは王室関連の宮殿や僧院など、格式の高い建築に限られたようで、地方の僧院を訪れると、本尊の直上以外は小屋組があらわしになっていることも多く (Fig. 28)、また、地主の邸宅など比較的裕福な民家の仏間であっても、天井が張られることはなかった (Fig. 29)。

バガン時代と同じく、コンバウン時代の多重屋根も、外観のみの多重に過ぎず、内部は一つの空間であった。中央内陣の柱が最も高く、周囲に向かって段階的に低くなり、同じ高さの柱を繋ぐ台輪のような部材が上下 2 段に回される (Fig. 30 左)。「台輪のような」というのは、下段は実際には台輪ではなく、柱の中途に巻かれた化粧材としての柱頭の上を繋ぐ、「見せかけの台輪」であるためである (Fig. 30 右)。天井まわりを構成する部材は、このように一部に化粧材を含み、構造と意匠とが必ずしも一致していない。ミャンマーでは一般に格式が高ければ高いほど、こうした傾向が顕著であるように思える。

天井が張られる位置は、バガン時代と同様に、須弥壇の上部にあたる中央柱間 1 間分 (場合によっては 2 間分) である。しかしながら、バガン時代との相違は、屋根と屋根との間に立ち上がる、ミャンマー語で「首」を意味する「ウェー」(小壁)との位置関係で、バガン時代は、最上部の「ウェー」の上に天井の痕跡が確認された一方で、コンバウン時代は、その下に天井が張られることである。そのため、コンバウン時代の天井は、全体で凹凸のない舟底形となり、天井裏は背の高い、空っぽの切妻小屋の様相を呈するようになる (Fig. 31)。

ちなみに、この舟底形の天井には、幾つかのヴァリエーションが存在する。天井の廻縁を柱ではなく、室内にわたされた小屋梁の上に立つ束が支持するものもあれば (Figs. 32, 33)、下からは支えず、梁に打ち付けただけのようなものも見受けられる (Figs. 34, 35)。これらはおそらく、長い柱材の入手が困難、あるいは不可能であったために、舟底形の形状だけを踏襲して、工夫を凝らしたものと解釈できる。逆に、長大な掘立柱が堂内を貫いて高く延び、天井を支えている空間を実現できたのは、このような部材を調達できた王室だけの特権であったことが、改めて了解されるのである。

ところで、舟底形の天井に関しては、文献史料にも記載がある。以前にも紹介した、ヤンゴン大学図書館所蔵の「アマラプラ王宮造営計画図」⁽⁴⁾には、木造多重屋根建築の計画図が複数含まれるが、これらは、「クウン柱」(通し柱)と「レッカ」(おそらく側柱)を用いた建物と、「テイッヤッ」(おそらく管柱)を用いた「ミャーサイ」(ミャー柱=小屋束を用いる建物)と呼ばれる建物との、大きく 2 種類に分類できる。束立ちの舟底天井が用いられるのは後者であり、屋根勾配よりも緩やかな勾配をもつ舟底天井の形状が、これらの立面図の下に添えられている (Fig. 36)。この形状にも寸法的な規定があったようで、興味を惹かれるところである。

4. 天井裏空間の拡大

以上で見てきたのは、バガン時代とコンバウン時代の多重屋根における天井の位置は同じではなく、コンバウン時代になると、天井の位置が下がり、これに伴って天井裏空間が拡大するということである。上述したように、天井には本尊の頭上を覆う天蓋のような役割があったはずで、ここに仏足石や蓮華といったモチーフが施されることから (Fig. 38)、その上(裏)にある天井裏空間が、極めて神聖かつ象徴的な場所であったことは想像に難くない。天井を張ることで、室内とは別世界となった天井裏の内部とは、果たしてどのようなものであったのか。現段階では情報が少な過ぎるが、修理のために見ることができた 2 つの例からは、ここに筋交いなどの補強材が多用され、構造的な強化を図った大工たちの隠れた努力を垣間見ることができる (Figs. 39, 40)。シュエナンドー僧院の天井裏空間にわたされた、装飾が施された部材は、意図的なものか、再利用なのかなど、まだまだ解明すべき謎も多い。

5. おわりに

以上で述べたミャンマーの木造建築の天井に関しては、いまだ不明な点が多いものの、天井まわりの意匠性を重視したことで、構造が裏側に隠されていく過程など、さらに検討を進めるべきであろう。特に、情報の少ないバガン時代の構法に関しては、現状の復元整備がミャンマー本来の伝統構法を損なっていることが指摘され、詳細な調査は喫緊の課題といえる。バガン遺跡は 2019 年、ユネスコの世界遺産に登録され、ますます観光地化が進むことは避けられないが、文化遺産の真の価値を守る意義が、まさに今、問われているといえよう。

注および参考文献

- (1) Pichard, Pierre, *Inventory of Monuments at Pagan*, 8 vols., Paris: UNESCO and EFEO, 1992-2001.
- (2) インベントリに掲載された写真から天井の痕跡が残る僧院遺構として、82, 214, 215, 269, 300, 452, 525, 579, 580, 685, 686, 690, 703, 907, 913, 1394, 1712, 1821を抽出した。
- (3) Cf. Myanmar Ministry of Culture, *Hagiography of Maha Thera Shin Arahan and an Account of the Reconstruction of Shin Arahan's Brick Monastery*, 1997.
- (4) 拙稿「ミャンマーにおける木造建築の柱について」『武蔵野大学環境研究所紀要』vol. 7, 2018.3, pp. 147-161を参照のこと。

謝辞

本稿は、2019年9月6日に日本建築学会大会学術講演会にて発表した拙稿「ミャンマーの木造仏教僧院にみる多重屋根の歴史的変遷」をもとに追記・発展させたものであり、2019年度日本学術振興会科学研究費助成金・基盤研究 (A) 一般「東南アジア「古代史」の下限としての15・16世紀に関する地域・分野横断的研究」(研究代表者: 青山亨・東京外国語大学教授)の成果の一部である。本稿に掲載した写真の一部には、筆者が東京文化財研究所在職中に撮影したものも含む。ミャンマー語史料の収集と解説にあたっては、石川和雅氏の協力を得た。記して感謝申し上げる。



Fig. 1 シンビューシン僧院群内 703 僧院 (2018 年撮影)



Fig. 2 シンビューシン僧院群内 686 僧院 (2018 年撮影)

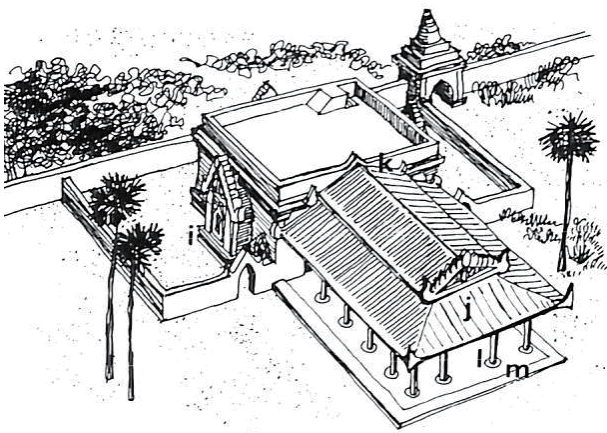


Fig. 3 Inventory より僧院の典型
(出典：Inventory, I, p. 40)



Fig. 4 54 僧院に復元された木造建築 南東より
(出典：Inventory, I, p. 121)



Fig. 5 82 僧院 南東より
(出典：Inventory, I, p. 155)



Fig. 6 214 僧院 南東より
(出典：Inventory, I, p. 322)



Fig. 6 215 僧院 東面 (1983 年撮影)
(出典：Inventory, I, p. 324)



Fig. 7 269 僧院 東面
(出典：Inventory, II, p. 23)



Fig. 8 300 僧院 東面
(出典：Inventory, II, p. 69)



Fig. 9 452 僧院 東面 北東より
(出典：Inventory, II, p. 260)



Fig. 10 525 僧院 東面 (1985 年撮影)
(出典：Inventory, II, p. 357)

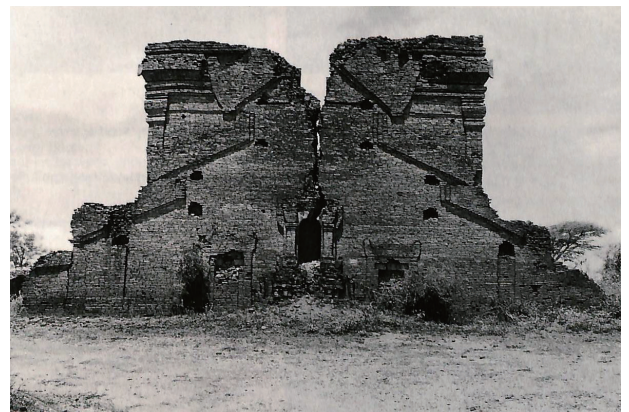


Fig. 11 579 僧院 東面
(出典：Inventory, III, p. 41)



Fig. 12 580 僧院 東面
(出典：Inventory, III, p. 43)

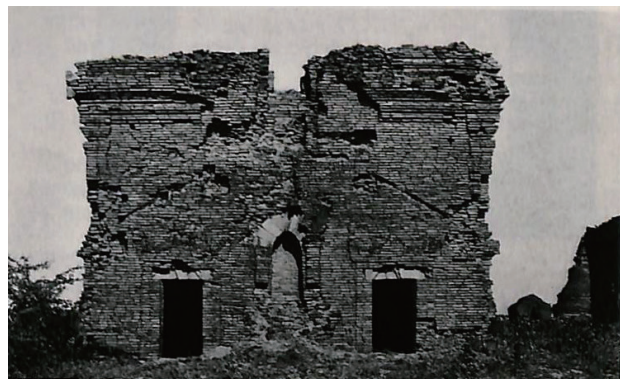


Fig. 13 685 僧院 東面 (1985 年撮影)
(出典：Inventory, III, p. 205)



Fig. 14 686 僧院 東面
(出典：Inventory, III, p. 207)



Fig. 15 690 僧院 東面 南東より
(出典：Inventory, III, p. 210)

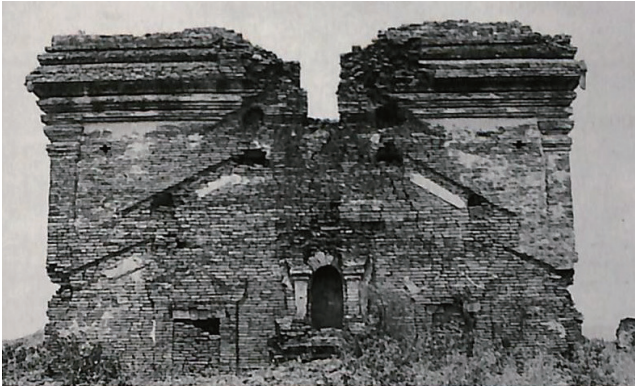


Fig. 16 703 僧院 東面 (1985 年撮影)
(出典：Inventory, III, p. 231)



Fig. 17 720 僧院 東面
(出典：Inventory, III, p. 257)

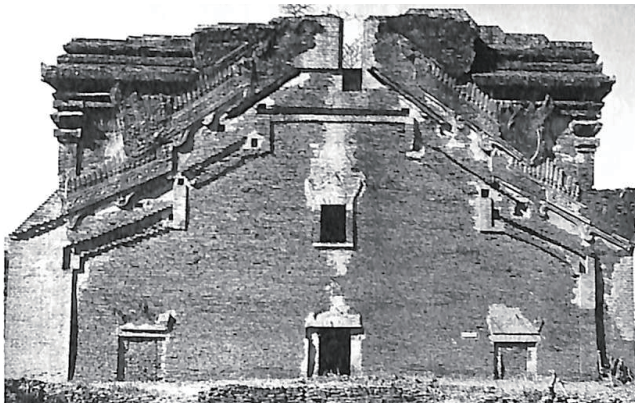


Fig. 18 907 僧院 東面 (1986 年撮影)
(出典：Inventory, IV, p. 117)

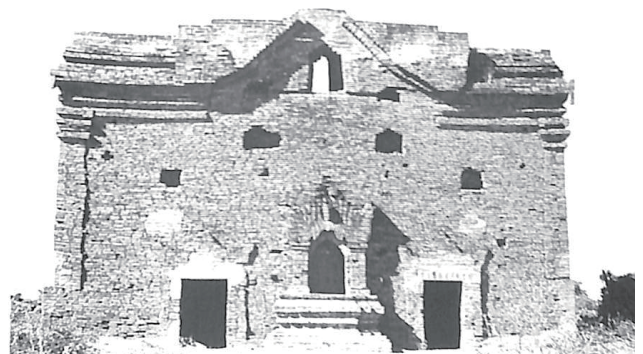


Fig. 19 1394 僧院 東面
(出典：Inventory, V, p. 339)



Fig. 20 913 僧院 東面
(出典：Inventory, IV, p. 125)



Fig. 21 1712 僧院 東面
(出典：Inventory, VI, p. 381)

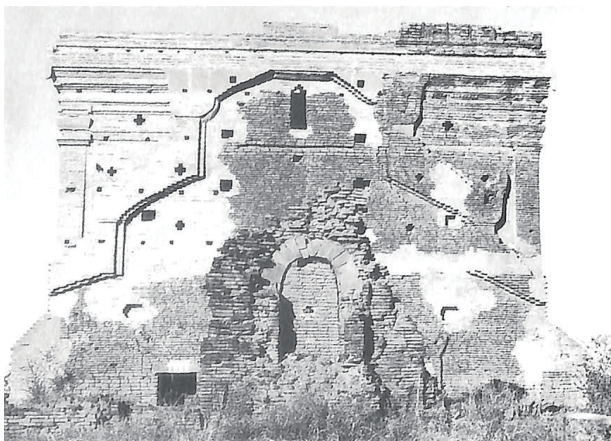


Fig. 22 1821 僧院 東面
(出典：Inventory, VII, p. 108)



Fig. 23 シンピューシン僧院群 復元模型 バガン考古博物館
(2018 年撮影)



Fig. 24 シン・アラハン (180) 僧院
(出典: Inventory, I, p. 285)



Fig. 25 復元されたシン・アラハン (180) 僧院
(2018 年撮影)



Fig. 26 698 僧院 北東より (1985 年撮影)
(出典: Inventory, III, p. 222)



Fig. 27 復元された 698 僧院
(2018 年撮影)



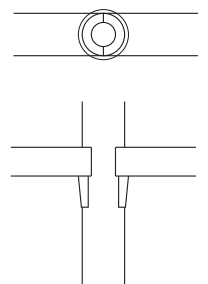
Fig. 29 ウーチンウー邸 (モンユワ) 仏間内観 (2017 年撮影)



Fig. 28 サカンター村僧院 (ティーポー) 内観 (2017 年撮影)



Fig. 30 (左) バガヤ僧院 (インパ) 内観 (2015 年撮影) / (右) 柱繋ぎ材模式図



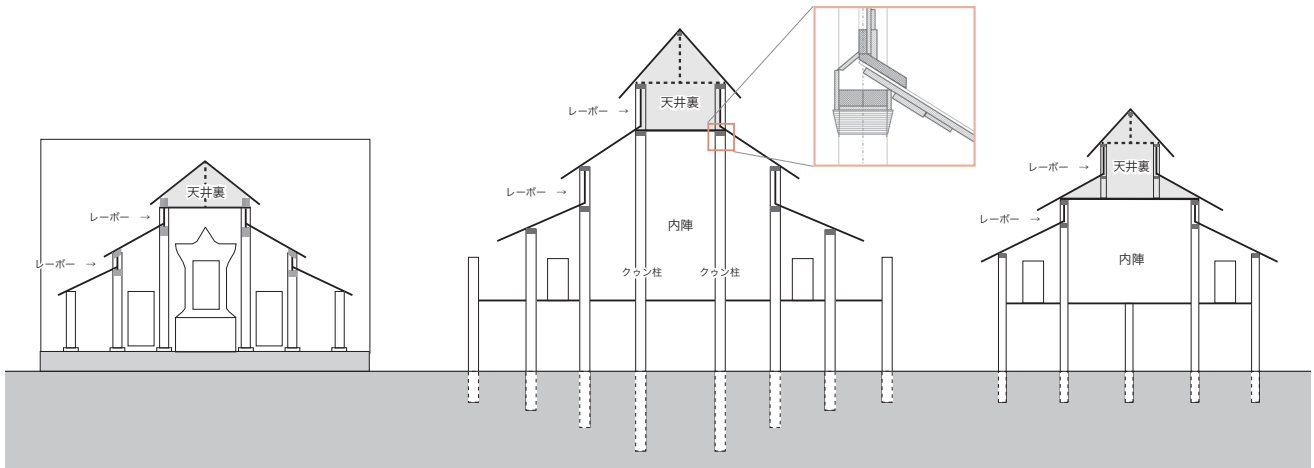


Fig. 31 木造多重屋根の比較模式図（左）バガン朝時代／（中）コンバウン朝時代・マンダレー地域／（右）コンバウン朝時代・シャン地域（出典：拙稿 2019）



Fig. 32 ビーチャウン（アマブラ）内観（2017年撮影）



Fig. 33 チェーミン僧院（マンダレー）内観（2017年撮影）



Fig. 34 マハーナンドーカンター僧院（ティーボー）内観（2017年撮影）



Fig. 35 モーガウン僧院（マンダレー）内観（2017年撮影）

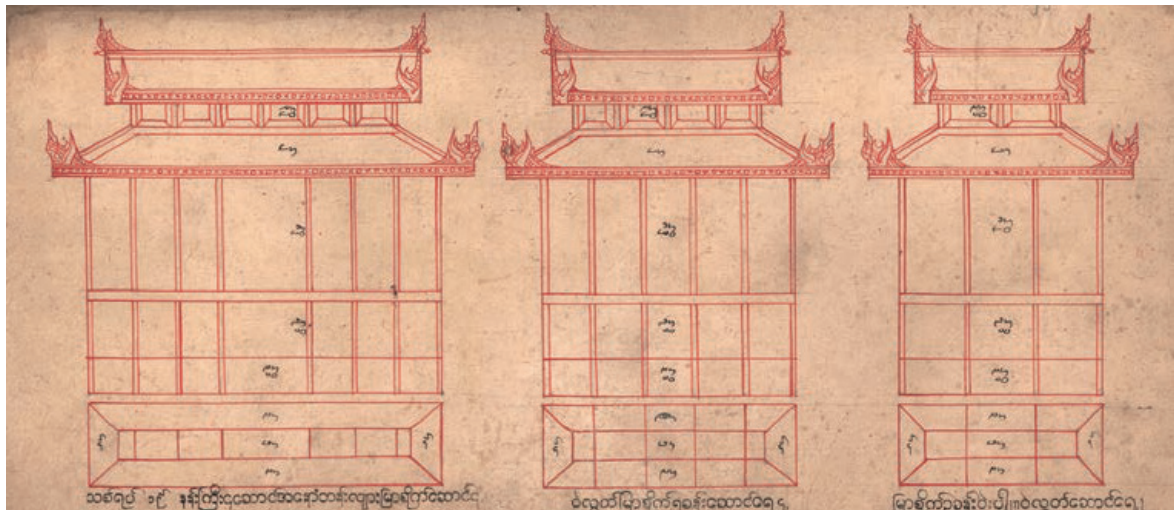


Fig. 36 ヤンゴン大学図書館所蔵 アマブラ王宮造営計画図に示される木造多重屋根建築図（抜粋）



Fig. 37 内陣天井の比較：(左) シュエナンドー僧院／(中央) シンアラハン僧院（復元）／(右) イェホー僧院（ティーポー）



Fig. 38 コンバウン時代僧院の天井装飾（いずれも 2013 年撮影）
 (左上) オンドンビン僧院（ミヤイン）天井の仏足石／(左下) バガヤ僧院（インワ）天井の蓮華／(中央) ナッタ
 タウン僧院（バガン）天井の蓮華／(右) バカンゲ僧院（バコック）天井の蓮華



Fig. 39 シュエナンドー僧院（マンダレー）天井裏（2015 年 WMF 提供）



Fig. 40 ミンドン王墓尖塔（マンダレー王宮内）天井裏（2015 年撮影）